

曹雪芹の生涯とその時代を描く「大伝」

谷口規矩雄

筆者は殆ど文学とは無縁の徒である。

その私が最近、計らずも在職中の同僚であった愛知大学教授の小山澄夫氏から本書の恵送を受けた。筆者は最初の数章を斜め読みしただけで、大変興味ある内容である旨を記して返礼を認めた。ところがその数ヶ月後、小山氏から電話があり『東方』誌に書評を書くようにということであった。筆者は何十年も前に『紅樓夢』（平凡社『中国古典文学全集』）を読んだきりで、曹雪芹についても全く何も知らないのである。ただ内容に興味があると云った手前、それに最近自身が乾隆朝の官僚の生懸について調べ出したこともあって、無恥も構わず書評をお引受けした次第である。

本書は曹雪芹の生涯について、時代背景、生立ち、流転の中で文筆活動、交

友関係など、本文三三章、附録三篇、図表一篇からなる詳細を極めた「大伝」である。のつけから筆者の無知を曝け出すことになるが、私は『紅樓夢』なる世界的な名作の作者の生涯がこれほどまでに不明なことが多いとは思ってもみなかった。否、不明どころか「久しいあいだ俗塵に埋もれたあげく、ひきつづき汚泥にまみれてきた」（著者日本語版序文）のであった。本書が、作者の生立ちの時代背景に相当の紙数を費やし（第一章から一〇章まで）ているのは、雪芹の生涯が何故久しい間「汚泥にまみれた」ままの状態であったかを明らかにするためであった。祖父曹寅は江寧織造官（織造官という地位が明以来特殊な意味をもつものであったことは本文参照）として康熙帝より絶大な信頼を寄せられ（康熙帝は三八

周汝昌著／小山澄夫訳
曹雪芹小伝



年の南巡の際、この織造署を行宮とした、曹家は全盛の時代を迎えていた。ところが雍正帝の時代になるや、父親曹頌が雍正帝の「政敵塞思黑（康熙帝の皇九子）」と関係があったことで「姦党」とされ、家産没収等の罪に落された。こうした事態の中で曹雪芹は生を受けたのであった。家運全盛の時代から一転「姦党」の子として貧窮に苛まれる生涯を送ることになったのである。ここで蛇足的な付言をするならば、著者は雪芹の家系の特殊性、即ち「内務府包衣」に属することや、清朝における「満人と漢人」との関係等かなり詳しく論じておられ、雪芹の生きた時代を理解するのに役立つ。とくに私のような歴史学徒にとっては示唆に富む

四六判 628頁
汲古書院 [6300円]

内容であった。

雪芹は赤貧に追い立てられ「前科」の
有る家門の子弟という負い目を背負いな
がら成長した。彼が幼少時、どのように
読書勉強し、長じて後どのように科挙受
験と関わりあい、また如何なる職務を授
かったものやら、そうしたことの詳細は
今日もはや知るすべがない（一五章）ら
しい。ただ一つ明白なのは、彼が選びとつ
たのは「雑作」よりもさらに「低級」で
文人の誰も足を踏み入れない「小説執筆」
の道であった。とはいえ生活のためには
何らかの職務に就かなければならない。
彼は家系の関係から内務府の旗人であつ
たので、宗学（清朝の宗室子弟の教育機関）
の職務についたが、それも教師ではなく
雑務職員であつたという。

雪芹が宗学に在職したことは生涯にわ
たり重要な意味を持つことになった。彼
はここで幾人かの友人を得たが、なかで
も終生の友となったのが敦敏・敦誠の二
兄弟であつた。この二人は清朝名門の末
裔に当るようであるが、先代が皇室の内
紛に巻き込まれ没落したのであつた。こ

うした点では彼等も雪芹とあい似た境遇
を経験していたと云うことになるかもし
れないが、そんなことよりはもつと人間
的な共感が両者を結びつけたのであつた
し、文学的才能のみが重んじられる間柄
となつた。「不羈磊落な性格で、世故と
いうものを目の敵にしていた」雪芹の人
柄にこの兄弟は強く惹かれたのであつ
た。とはいへことはそれほど簡単ではな
かつた筈である。「罪を得て家産を没収
されたあげく零落して貧苦にあえいでい
た」うえに、「親類縁者の富兒の人々か
ら手厚い侮辱と軽蔑をさずかつて」いた
雪芹に近づくことは、自分たち自身も「不
肖」の行状の「風子（うつけもの）」の仲
間になることを意味したからである。に
もかかわらず彼等の友情は終生変わるこ
とはなかつた。

もう一人の重要な友人は張宜泉なる人
物である。曹雪芹が貧苦に喘ぎながら住
居を転々とし北京西郊に住んだ時、彼は
村塾の教師をしていた。姓を張といい、
名は不詳、宜泉という字であり、旗人であつたことだけが知られている。著者の

言では、彼は「その経歴に汚点があり、
家門にも仔細があつて、酒ずきで詩をこ
のみ、世人からみれば落ちこぼれの不孝
者」で、「氣宇壮大な硬骨漢でありなが
ら不羈磊落なユーモリストで、しかも社
会から疎外された」（二四章）人物であつ
た。あらゆる点で雪芹と似かよつた性格
ということができる。彼の詩によつて雪
芹の身辺の事情を知ることができると
も多いらしい。さらにもう一人の雪芹に
とつてかけがえない支援者であつたの
が「脂硯齋」なる人物である。この人物
については氏素性も定かでないらしい
が、雪芹はこの人から「助けと慰め」を
えて「小説」の執筆を続けることができ
たのであつた。著者の言に従えば、この
人物の功績は「孤独と寂寞のさなかに
あつた曹雪芹にたいし、力づよい支えと
なり励ましとなり、さらに小説創作にお
ける協力者の役割を果たしたこと」（二七
章）なのである。

これらの数少ない雪芹の友人や支援者
に対する著者の目は非常に行き届いてお
り、雪芹に関する資料の非常に少ない中

から、これら友人の詩を通して雪芹の人の柄や生活態度を浮かび上がらせるのに成功していると思う。私のように詩文から遠いものでも敦氏兄弟や張宜泉の詩句にたいする著者の解釈は誠に適切で風趣さえ感じさせるものがある。著者は詩の大家らしいが(失礼)宜なるかなである(巻末、伊藤漱平氏「跋語」参照)。

著者周汝昌氏は本書『曹雪芹小伝』によつて、『紅樓夢』という「世をうらみ時をのしる書」を執筆することが「人の予想をはるかに超えて、どれほど大胆な勇氣と、いかほど堅牢な信念と、いかばかり剛毅な氣力を必要とした」かを明らかにしようとした。誠に本書は『大伝』というべき大作である。著者は中国における『紅樓夢』研究を代表する一人であるが、その力量はこの一作においても遺憾なく發揮されており、筆者は本書を読み進むうち、曹雪芹に人間的親近感さえ覚えたのである。なお本書の各章末に付された原注も非常に内容のあるもので、清朝史に興味のあるものには大変参考になる。

小山澄夫教授の翻訳になる本書が二〇年の歳月を経て日の目を見たのは誠に慶ばしい限りである。訳文は氏の人柄を反映してなかなか凝ったようであり、それを感じさせず流麗で読みやすい。その上、氏の手になる訳注が懇切を極め、実に詳細で原注と合わせて本文の理解に役立っている。

最後に蛇足の言を付することをお許しただきたい。それは曹雪芹の生涯にも大きな影を落としている雍正帝の時代に関することである。わが国では雍正帝は官僚の専横をよく抑え、汚職を撲滅しようとした出色の皇帝として、どちらかといえば良く評価されている。これは地丁併徴の実施や、陋規を抑え養廉銀の制度を創始したこと、また虧空(官僚の使込み)の徹底した取り締まりなど、主として経済的な成果に基づくものといえよう。一方中国では、雍正帝の評価はあまり芳しくないものようである。それは雍正帝の帝位継承にまつわる問題に關してである。本書の著者も「悪辣な手段をもちいて……みずからの同胞兄弟まで

謀殺して帝位にのしあがった人物」(七章)が雍正帝であったと決め付けておられる。帝位継承問題をどのように取り上げられるかは簡単ではないとおもうが、帝位継承にからんで引き起こされた政争については、歴史研究の立場からはさらに考察が深められてもよいのではなからうか。

隆科多や年羹堯の失脚の政治的背景や、虧空の問題にしても単に経済的な問題として片づけてよいのであろうか。雍正時代の政治には帝位継承にかかわる政争の影が各方面に残っているように思える。本書を読んで考えさせられたもう一つの点であった。

(たにぐち・きくお 大阪大学名誉教授)

月刊『東方』の定期購読をお薦めします

■A5判・本文六四頁/毎月五日発行

■年間購読料一、〇〇〇円(税・送料込み)

■お申込は郵便振替(〇〇一四〇一四一

一〇〇一 株式会社東方書店)まで。ご住

所・お名前・何月号からご希望かを明記。

■Fujisan.co.jpにて、『東方デジタル版』が購読いただけます。http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281690377

1281690377